



図書館だより



2025年
1月31日発行

秋草学園高等学校 図書館

新しい年を迎えてから瞬く間にひと月が過ぎようとしています。2025年がみなさんにとってどんな1年になるか、方向は見えてきたでしょうか。今年の十二支は巳（へび）。苦手とする人は多いでしょうが、金運や繁栄をもたらす縁起物、また生命力や再生・変化や進化の象徴とも言われるそうです。十二支にあやかっ、それぞれが掲げた目標に向かって頑張り、日々進化し繁栄する年にしていきましょう。図書館も色々な形で応援していきます。3年生の皆さんは卒業まであとわずか。未練を残さぬよう、存分に高校図書館を使い倒してくださいね。



第172回芥川賞・直木賞が決定！

第172回 芥川賞

安堂 ホセさん 『デートピア』

鈴木 結生さん 『ゲートはすべてを言った』

第172回 直木賞

伊与原 新さん 『藍を継ぐ海』

1月15日に第172回芥川賞と直木賞の受賞作が発表されました。安堂さんはデビューから3作品が全て候補にあがり今回で受賞。鈴木さんは21世紀生まれとしては初の芥川賞受賞者です。伊与原さんは昨年、著書『宙わたる教室』がドラマ化された、話題の作家です。

913.6-8 『ゲートはすべてを言った』

鈴木 結生 著 朝日新聞出版

ティー・バッグに書かれていた名言。日本におけるゲート研究第一人者の博覧強識は、ゲートの箴言とされるその言葉の出典に覚えがありません。言葉をめぐるアカデミックな冒険は、真実に到達できるのでしょうか。



913.6-1 『藍を継ぐ海』

伊与原 新 著 新潮社

どれも科学的知識を題材に、人間性を深く追求した短編集です。5作品に共通するのは仕事。天命ともいえるような事を、普通の人々がこなしていく尊い姿です。その成果は次代へと引き継がれることでしょ。



913.6-7 『よむよむかたる』〈直木賞候補作〉

朝倉 かすみ 著 文藝春秋

「書けなくなった作家」安田は、叔母の喫茶店を引き継ぐため、埼玉から小樽へやってきます。喫茶店では個性的な老人たちの読書会が定期的開催されます。伏線回収がスツキリ。作中に出てくる『だれも知らない小さな国』（佐藤さとる著 講談社）もあわせてどうぞ。



📺 今期放送のドラマの原作小説 📺

913.6-カ 『パニョな毎日』

賀十 つばさ 著 幻冬舎

パティスリー・ブランシュは素材にこだわった洋菓子屋ですが、近隣にできたショッピング街の影響を受け、閉店してしまいます。閉店した店のキッチンで、店主の白井は料理研究家の佐渡谷と共にお菓子作り教室で、「心のリハビリ」を手伝うこととなります。



913.6-7 『リラの花咲くけものみち』

藤岡 陽子 著 光文社

父親の再婚相手に悪意を向けられ、中学生時代は引きこもりになってしまった聡里。祖母に救い出され、その後北海道の大学で獣医学を学びます。命と向き合い、同級生や先輩、獣医師、地域の人々との関わりを通して、6年間で成長していく姿が、美しい自然と共に描かれています。



📖 新着コーナーの気になる本

588-カ 『アイスの旅』

甲斐 みのり 著 グラフィック社

冬でも美味しいアイス。この本ではその地方でお馴染みの「地元のアイス」を中心に紹介しています。旅行に行ったらぜひ食べてみたい！そんな気になるアイスを見つけてみてください。また、東京のアイスも載っているのでぜひそちらもご覧ください。



760-シ 『生活はクラシック音楽でできている』

渋谷 ゆう子 著 笠間書院

実は日常生活はクラシック音楽で溢れています。テレビ番組やCMで流れるBGM、お風呂が沸いたときのあのメロディ、運動会でよく聞く曲……。QRコードを読み取って実際の曲を聴きながら、解説を読むことができます。



📖 司書の今月はこの本読みました



推理小説の新人作家を発掘してきた鮎川哲也賞。過去には『屍人荘の殺人』（913.6-1）や『ジェリーフィッシュは凍らない』（913.6-1）、『体育館の殺人』（B913.6-7）等が受賞しています。昨年の第三十四回を受賞したのは山口未桜さんの『禁忌の子』（913.6-7）です。救急医の武田の元に搬送されてきた身元不明の溺死体は自分と瓜二つ。中学の同級生であり同じ病院で働く城崎と共に、遺体の身元を調査するにつれ、驚くべき真相に辿り着きます。現役医師の著者が書く医療シーンは緊迫感が伝わってきて、タイトル回収がされた時には瞠目させられます。【吉村】